

私の考えるコーチング論 — 対象選手に応じたコーチング —

コーチング学研究編集長 関子 浩二 (筑波大学)

特集にあたって

昨年発刊された24巻1号から、スポーツ方法学研究はコーチング学研究へと名称を変更した。「名は体を表す」という言葉もあるが、この24巻2号からはコーチング学研究という名に相応しい学術誌にするために、コーチングに関する内容を特集として取り入れることにした。記念すべき第一回のテーマは、「私の考えるコーチング論」とした。3名の先生に、自らが日頃考えているコーチングについての持論・私論を述べて頂いた。中川先生（筑波大学）には、エリートアスリートのコーチングと題して、エリートコーチの持つ能力と行うべき仕事について執筆頂いた。鯉川先生（順天堂大学）には、女子長距離ランナーのコーチングを例にしながら、女性アスリートのコーチングについて執筆頂いた。大嶽先生（日本大学）には、サッカーのクラブチームに所属する育成年代のコーチングを例にしながら、ジュニアアスリートのコーチングについて執筆頂いた。3名の先生は、コーチング実践で生きておられると同時に、その実践を理論化しようという試みも遂行しており、実践と理論の両輪で走っておられるトップランナーである。内容はいずれも非常に興味深いものばかりである。これらの特集を通して、コーチング対象が異なると、コーチングの仕事やコーチング能力、必要とされる知識はかなり異なるが、しかしひとたびコーチングとなれば、いずれの対象者にも共通した出来事があることもまた事実であり、その内容がコーチングの一般理論となり、コーチング学の基本的な課題や研究対象になるかも知れないという考えに至る。

なお、本号には特集とともに5つの論文を掲載することができた。この中には、これまでには希少な「実践知に関する質的研究」や「長期に渡るトレーニング経過を対象にした実践型研究」を含めることができた。若いコーチングの研究者達には、これらの研究のように、必ずしも従来の科学方法論（母体科学の方法論）に限定されず、コーチング実践に役立つ知見を提示することを第一にした論文に挑戦して頂きたいと願っている。このような論文がコーチング学研究に多数集まり、他の学術論文誌とは異なるオリジナリティーを打ち出すことができるようになればと思う。

また、この24巻2号は日本体育学会体育方法専門分科会報告との合本号である。現在、コーチング学会会員は約600名、体育方法専門分科会会員は約1,200名、両方に所属している会員は約300名であると聞いている。体育方法専門分科会会員のみの方には、この合本号としてのコーチング学研究を読んで頂くことができる。一方、コーチング学研究は年に2巻発刊している。この号を読み、コーチング学研究の内容に興味を持って頂いた皆様には、是非、日本コーチング学会に入会して頂き、2巻とも読んで頂きたい。そして、日本コーチング学会会員としての活動にもご協力頂き、日本の体育およびスポーツの発展に寄与して頂けることを願っている。